

仮面ライダーアトリエ

青ずきん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

地球から遠く離れた惑星『デイスパル』。

その星に浮かぶ巨大な大陸の中心地に位置する新生エルフ都市『アルカディア』の中央には、アルカディア最大級の魔法学校『パラノーマル魔術学院』が存在している。

パラノーマル魔術学院 錬金術科 初等部四年生のシャリア・ヒアラルクは、ある日を境にその運命を大きく変容させることになる。

錬金術士の仮面ライダーへと変身し、迫り来る怪物を打ち倒し錬金術で日常を守れ！

※本作は『仮面ライダー』を原作とする二次創作小説です。

※仮面ライダーと銘打っていますが、バイクには乗りません。ごめんなさい。

※作中に残虐な描写・不快な描写が含まれます。閲覧の際はご注意ください。

※本作は株式会社コーエーテクモゲームス（ガストブランド）様より販売されている『アトリエ』シリーズにインスピレーションを受けて創作した作品ですが、アトリエシリーズに登場する人物・世界観とは一切関係ありません。

目次

第1話	正義↓好奇心のちヒーロー	1
第2話	圧倒↓巨大化のちテイクオフ	16
第3話	咆哮↓自然体のちサデイスティック	24
第4話	踏舞↓超爆発のちオンステージ	32
第5話	邂逅↓問題児のちオブザーバー	40
第6話	手品↓古生物のちエンターテイナー	48
第7話	幻惑↓楽観的のちマイノリティ	55

第1話 正義↓好奇心のちヒーロー

「痛いっ！ 痛いよ……お願いだからもうやめてっ!!」

片手で数えられる程の数しかない街灯が照らす、夜の住宅街。高層ビルが立ち並んでいるわけではないが、普段の昼の様子との差異がこの街を都会のように見せている。ゴミの詰まった袋等が投棄されている薄暗い路地裏には、怯える少女を取り囲む3人の小さな少年達があった。

「ははっ、やめてだよ」

「誰がやめるかばっか」

「ひっでえww」

あまり丁寧な手入れがされていないボサボサな髪、外の空気とは裏腹に寒さを感じさせない半袖半ズボン、極めつけは成熟していないことが見てとれる低身長。いかにも『悪ガキ』というような様相を醸し出す男子3人は、1人の少女を相手に暴行を加えていた。

2人が少女の両腕を掴み、残った1人のボス格が少女の腹目掛けて正拳突きを繰り返す。

「あぐっ……!」

急所に入ったのか、少女は痙攣しながら唾を吐いた。胃の中身すら吐き出してしまいそうなほど逼迫したその状況で、少女は蚊の鳴くような声で助けを求めた。

「誰か………助けて………!」

「そこまでだよ!」

「………えっ?」

砂埃が舞う程の勢いで、『それ』は空から降ってきた。

左右にレバーとリフトのようなもの、中央に金魚鉢のようなものが

取り付けられたドライバーを腰に巻いた、謎に包まれた戦士。灰色の、体全体に液体が流れ落ちてきているかのようなアーマーと頭部、黒い素体。

夜の闇に溶け込む色合いではあったが、少女の瞳には間違いなく救世主として映っていた。

「寄って集って女の子をいじめる卑怯者は、私が許さないよ！」

堂々とした佇まいに、只ならぬ覇気を感じさせる声。それは、少年達を威圧するには十分すぎるものであった。

興が醒めたのか、はたまた戦士の圧に怯懦したのか。どちらなのかは分からないが、後退りを始めた少年達は眉を^{ひそ}顰めて口を開いた。

「……何コイツ。行こうぜ」

「……チツ」

「今度こそとことん殴られてもらおうからな！」

口々に捨て台詞を吐き、蜘蛛の子を散らすように深夜の路地裏を後にした。

それを見届けてから戦士は少女の方へと振り返り、手を差し出した。

「大丈夫？」

「……はっ!？」

間抜けそうな声を上げ、少女——シヤリア・ヒアラルクは起き上がった。

肩甲骨に届く程の、そして右目の上に黒いメツシユの入った金髪に、水色の右目、黒色の左目というオッドアイ。ほんの少しだけ尖った耳に、学校という場には似つかわしくない白と黒のゴスロリを纏い、白い靴下と爪先の青い上靴を履いている。

辺りを見回すと、年代の少年少女、そして教師と思わしき男性がこちらに注目している。

黒板の半分を埋め尽くす白い文字に、^{さんざん}燦々と輝く陽の光が射し込ん

でくる窓。木目調の床に壁に天井、後方の壁に引っ掛けられたリュツクの数々。

「どうやら、授業の最中だったらしい。」

「……あははは……」

誤魔化すための乾いた笑いは、余計に教師の呆れを誘った。

「……はあく、また寝ちゃったけど……でも、また『あの夢』を見れたのは良かったなあ。出来ればもう一度みたい」

授業終わりの昼休み。先程のことを振り返りながら、シヤリアは廊下をなんの気無しに歩いていた。

シヤリアが通っているのは、惑星『デイスパル』の新生エルフ都市『アルカディア』の中心に位置するアルカディア最大級の魔法学校『パラノーマル魔術学院』。

地球からは30光年ほど離れた位置にあるが、おおよそ地球と同じような生態系が完成した。しかし異なる点も当然存在する。その最たる例がエルフだ。

現状、デイスパルという星で実権を握っているのはエルフという種族だ。人間よりも早く進化した知能を得て、人類を支配することに成功した。

エルフが台頭したこの世界では、魔法陣を描くことで発動する魔法が普及していった。魔法を全く扱えない人類にとってはいい迷惑でしかなかったが、そんな人間達の意見は世界の主導権を持つエルフに消されてしまっている。

そんな中、アルカディアに魔法学校『パラノーマル魔術学院』が設立された。

四大元素の操作や結界の展開などを学ぶ『普通魔法科』、精霊などを召喚する魔法を学ぶ『召喚魔法科』、詠唱することで効果を発揮する魔法を専門的に扱う『詠唱魔法専攻科』、パラノーマル魔術学院随一の偏差値を誇る魔法学科の最高峰『上位魔法専攻科』など……様々な魔法の教鞭を執ることを売りにした結果、僅か数ヶ月で生徒数700

0を超えるマンモス校となった。小学校の内容から大学で習う内容までカバーする、16学年が同じ校舎で学ぶ一貫校であることも、人気の理由なのかもしれない。

その中でシャリアはというと、錬金術を中心的に学ぶ『錬金術科』、その初等部4年生である。普通魔法科で履修する内容を全く勉強しないわけではないが、その名の通り錬金術を主教科として学ぶために、他の学科と比べて異質な雰囲気を纏っている。

錬金術というのは、その昔地球でも行われていた研究の一つだ。掻い摘んで説明すると、それは鉄を金へと変貌させるといふ極めて無謀な研究であった。当然そんな研究が成功するはずもなく、地球の人類は実質的に錬金術を究めることを諦めた。

しかし、錬金術科で教鞭を執る教師達をはじめとして、惑星デイスパルの住人の一部は錬金術を——鉄を金に変えるような芸当を、成功させてみせた。

だが、『この世界』ではあまり受けが良くなかったらしい。エルフ達が使える魔法に比べると地味であり、尚且つ魔法陣を描くだけで済む魔法と違ってかなり手間がかかる。そんなこともあって、錬金術はあまり普及しなかった。世界広しとは言えど、錬金術を教える学校はそうそう無い。

そうして錬金術科は、いつしか他学科から蔑まれるようになっていった。やれ『陰キヤの集い』だの、やれ『落ちこぼれ学科』だの。シャリアが二度見される理由の一つは、錬金術科としてのオーラが無意識の内に放たれているからかも知れない。

「こう、シュバっ！ シュバっ！ って感じで、悪党を倒すのかっこいいよねえ。それを臨時体験出来るんだから、夢というのは素晴らしいものだよねえ。夢を見るように私たちを作ってくれた神様に感謝！

だね」

人目を憚らず、シャリアは次々と奇妙なポーズを取る。周囲から憐れみの目を向けられていることはつゆ知らず、いつまでもダサイオノマトペが広々とした廊下を飴くだましている。

3人の少年が少女に暴行を加えている現場に、ヒーローとして現れる。シャリアが、幾度となく見た夢だ。シャリアには、この夢にこだわる理由が一つある。それは、『自身の記憶喪失の謎を解明するため』だ。

シャリアには、ここ数年近くの記憶が一切存在しない。代わりに、少女を助ける夢を毎日のように見ている。これが失われた過去の記憶……そして自分ではないかと、シャリアは考えている。しかし、なぜ自分は記憶を失ってしまったのかという疑問に対するアンサーは、未だに見つかっていない。

今は分からなくても、いずれ答えが見つかるはず。それまでは、ただかつこよく少女を救う夢の中の——ヒーローとして皆を救う自分の栄華に陶醉していよう。

そうして、シャリアはこれまでの毎日を過ごしていた。

「てっ」

「あつとー… ぐ、ごめんなさい」

夢にトリップしきっていたシャリアは、男子生徒とぶつかったことのようにやく意識がこちら側に戻った。ぶつかった相手は緑色のネクタイと白いシャツを覗かせる銀鼠色のブレザーとズボンを着用していた。短く濃い金髪に、緑色の瞳。清潔感のある容姿に、シャリアの罪悪感が少し増す。

シャリアが謝ったのを聞き、相手の生徒もこちらこそすみません、と頭を下げようとした。が、相手の生徒はある事に気が付いた。シャリアが、制服を着用していない事だ。

シャリアは全く気付いていない……というか、恐らく知らないのだろう。

パラノーマル魔術学院では、基本的に中等部から制服を着用する決まりになっている。男子ならブレザー、女子ならセーラーという具合だ。しかし一つだけ、初等部でも制服を着用する例外の学科がある。その名も……

『上位魔法専攻科』。

初等部と中等部では、そもそもとして教室が存在する階が違う。……つまりだ。シャリアがぶつかつた相手は初等部の……それも、『落ちこぼれ学科』と揶揄される錬金術科とは正反対の、ヒエラルキーの頂点に位置する上位魔法専攻科の生徒なのである。

まるで別人かのようなしなめつ面に変わり、相手の生徒はため息を吐いてから馬鹿にしたような声で喋り始めた。

「……はあ。誰が相手かと思つたら、上位魔法専攻科じゃないのか。謝つて損した」

「えつ、ちよつ……流石にそれは酷くない？ 確かに、私は何も考えてなさそうに見えるかもしれないけど、人並みに傷つく心は持ち合わせてるよ？」

相手の生徒はもう一度ため息を吐いてから呆れたように目を瞑り、若干怒りが混ざつたような声色でシャリアに問いかける。

「……所属は？ どこ科？」

「夢クリエ○シヨン錬金術科っ！」

両手を腰に当て、鼻高々というように言い放つ。対する上位魔法専攻科の生徒はというと、最底辺とも言える学科に所属しているという事実を自慢げに話すシャリアに呆れたのか、右手で両目を覆い隠している。

「……よりによつて『落ちこぼれ学科』かよ。最悪だ」

「最悪つて……そこまで言わなくてもいいじゃん！ 誰かを傷つけるようなことは言っちゃダメだつてお母さん言つてましたー」

「知るかよ。もう二度と関わんな」

「話聞いてた!? 誰かを傷つけるような——」

「うっせえ低脳。それ以上俺に話しかけんな。馬鹿がうつる」

それだけ吐き捨てると、上位魔法専攻科の生徒はそそくさと立ち去つていった。シャリアは、頬を思いつきり膨らませたままその様子を見届けて教室へと戻つていった。

「んーっ……やつと終わったあー！」

一日の全ての授業を終えたシャリアは、チャックの閉まつていない

青いリュックを背負って背伸びをしたまま天井に向かって叫ぶ。溜まっている疲労のせいで長時間腕を上げることが出来ないが、それでもこうすることで一日の疲れが取れる気がするということ、シヤリアは日課のように行なっている。

昇降口まで続く天井はガラス張りになっており、傾きかけた陽の光が射してくる。今は、地球では『春』と呼ばれる時期だ。まだ前節の寒気の残滓があり、陽の暖かさを阻害している。

昇降口までたどり着き、運動靴へと履き替え終わったまさにその時。学校を、一体の怪物が襲った。

「うわあああー！」

「みんなは早く逃げなさい！ 先生が食い止めておくから！」

怪物が現れたのは、下校中の生徒でござった返している校門前。『マテリイ』と呼ばれる怪人の一種——『カースマテリイ』だ。岩のようにごつごつした黒い素体に、禍々しい紫色のラインが身体中に走っている。

周囲の生徒や教師を手当たり次第吹き飛ばしながら、校舎の方へと前進している。昇降口まで残り数メートルというところで、カースマテリイはちやうど帰宅しようとしてきたシヤリアと鉢合わせた。

「えっ……うえええっつ?! 何あれ何あれ! きつ、気持ち悪い……!」

無意識の内に本音を零しつつ、シヤリアはゆっくりと後退していく。対するカースの方はというと、シヤリアの言葉が刺さったのか一瞬身体を震わせ、シヤリア目掛けて駆け出した。

「うえっ、ちよっ、ちよちよちよタンマ! タンマってば!」

鬼のような気迫で迫り来るカースを相手に、シヤリアは思わず背を向けて走り出した。

もし自分に魔法の才能があつて普通科に通っていたのなら、今頃空を飛んで逃げられたんだろうな、と。そんなことを考えながら、必死に怪人との距離を離そうと試みる。

とは言えシヤリアの体力は無限ではないし、何より規格外の腕力や

脚力を誇る怪物がいつまでも追いかけてここに付き合ってくれる保証は何処にもない。その証拠に、カースは既にもう少し手を伸ばせばシヤリアに届く程の距離まで迫っていた。

……のだが、一つの小さな火球がそれを阻んだ。

「……ッ!?!」

シヤリアへと伸ばしていた手を引つ込めて、カースマテリアは火球が飛んできた方へと振り向いた。そこに居たのは……

「……あれ? 君って確か、私のこと馬鹿にしてきた——」

「……ん? お前、まさか昼間の……? 何でまだここに居んだよ、さっさと帰りやがれ。邪魔だ」

昼間にシヤリアが出会った、上位魔法専攻科の男子生徒だった。眉の吊り上がった表情で重そうなりユツクを背負ったまま、右手で校門の方を指し示す。

しかしシヤリアは話を聞く気などなく、遂には口をすぼめて男子生徒へと反駁を始めた。

「あのねえ、女の子には優しくしましょうって習わなかった? 君が言うところの『落ちこぼれ学科』の私でも知ってることだよ? その程度のこと知らないなんて——」

「よそ見してんじゃねえ馬鹿!」

「うわっ!?!」

話の途中で男子生徒はシヤリアの元へ駆け出し、力の限りを尽くしてシヤリアを突き飛ばした。その衝撃でシヤリアのリユツクから何かが飛び出したのには気にも留めず、手を引つ込めつつ身体を退け反らせる。

次の瞬間、カースマテリアは右手を上へと振り上げ、真正面に紫がかかった黒色の衝撃波を放った。衝撃波は男子生徒の眼前から数センチほど離れた場所を横切り、静かに地面を抉った。

目を瞑っていたシヤリアは何かが近くを通ったような音を聞いただけにしか感じなかったが、男子生徒の間一髪というような表情から自身の置かれた状況を思い出すことができた。

流星にこれは、命が危ない。直感でそう感じたシヤリアは、慌てて

立ち上がって校門の方へと身体を向けた。

そこでシャリアは、自身のリュックのチャックが閉まっていないこと、そしてそのリュックから何かが落ちたことに気が付いた。気にしている場合ではないかもしれないが、物によっては明日の授業にも影響を及ぼすかもと考えたシャリアは落とし物に目をやった。

「……？ 何これ……」

シャリアが落としたのは、よく分からないバツクルであった。淡い水色をした逆さ台形の中央には金魚鉢のような容器があり、その横には指を引つ掛けられる白いレバー、そして小さな白いリフトのような物を取り付けられている。

少しの間触れていると、突然バツクルのことを思い出した。

そうだ。これは、父親からお守りとして託された『アトリエドライブ』だ。

今は亡き、父親から。

「おいてめえ何してんだ！ さっさと帰れつつたろうが！」

火球やら何やらを放ちながら怪人に応戦していた男子生徒が声を荒げる。額からは汗が噴き出しており、疲弊しているのがすぐに分かった。

軽く笑みを浮かべ、立ち上がって怪人の方を向いてシャリアは口を開く。

「その必要はないよ。だって——」

「これから私が、そいつを倒すからね」

誰に教えてもらうでもなく、シャリアは自然とバツクルを腰に巻いた。即座に帯が伸び、しっかりと固定される。チャックが空いたままのリュックに手を伸ばし、シャリアは片手で包み込めるほど小さな小瓶——ブランクライダーエキス——を取り出した。口部にはコルクで栓がされており、灰色の液体を閉じ込めている。

笑みを崩すことなくコルク栓を親指で弾き飛ばし、ベルト右側のリ

フトにはめ込む。

〔Let's play!〕

若い男性の声が発され、ピアノで弾いているようなメロディが辺りに響き渡る。予期せぬ事態に、男子生徒とカースマテリイは呆然とシャリアを見つめていた。それを知って知らずか、シャリアは更に口角を上げて宣言した。

「変身!」

〔Inject!〕

叫ぶと共に、リフトの下にあるレバーに人差し指を引つ掛けて外側に引つ張る。すると一瞬のうちにリフトを上へと運び、小瓶の口を金魚鉢のような容器の方に傾けた。

閉じ込められていた液体が流れ出し、容器に蓄積されていく。全て注がれたのを確認すると、シャリアはレバーから手を離れた。自動的にリフトが元の位置へと戻っていく。

〔サクセスミックス! Let's enjoy, ブツ、ブツ、ブランク!〕

完全にリフトが戻るのを待たず、ベルトは中央から小さな灰色の渦のようなものを出現させる。回転数を上げるごとに大きくなっていくそれは、わずかに数秒でシャリアの身体を完全に包んでみせた。

「何だ……一体何が起きてる……?」

男子生徒は、その様子を見つめることしか出来なかった。暫く呆気に取られていたが気を持ち直し、再び警戒体勢を取る。

そしてシャリアを包む渦が目にも止まらぬ速さになった頃、渦は弾けて霧散した。

四肢に白いラインが走る黒いアンダースーツを纏い、液体が流れ落ちていくかのような形状をした灰色の胸、肩、膝アーマーに覆われた身体。

灰色の液体が斜めに渦巻いているようにも見える、黄緑色の複眼の光る頭部。

夢にまで見たヒーローの姿に、シャリアは『変身』を遂げた。

その名も『仮面ライダーアトリエ ブランクMIX』。あらゆる物

質を『調合』して新たな物質を創り出し、その力で世界を救う『錬金術』士だ。

「さてさて、良い素材が取れますようにっ！」

澆刺とした声を発しながら、カースに向かつて走り出す。対するカースはというと、アトリエの姿を前にして呆然と立ち尽くしていた。

そんなカースの様子など知らぬ存ぜぬという風に、アトリエは両腕を無秩序に振り回す。先程までのカースの優勢が嘘のように逆転した。

「ほいっとおー！」

両手を同時に突き出す張り手でカースが吹っ飛ぶ。再び立ち上がったところで、ようやくカースは反撃の意思を見せた。紫のアクセントが入った黒い炎を右腕に纏い、アトリエの左腕目掛けて放つ。

「わわわっ！ 何これ!? 動かないんですけど!!」

放たれた炎はアトリエの左腕に絡みついた。瞬間、アトリエは自身の左腕から力が抜けていくのを感じた。脳からの命令を失った腕がだらんと垂れる。

それを狙ったかのように、カースは指を鳴らして増援を呼んだ。

暫くして、空から銅のような金属光沢を放つ背丈の低い戦闘兵『アノード』が飛来した。半分はアトリエ達を無視して校舎の方へと向かい、もう半分はカースと共にアトリエをとり囲む。

「ちよ、そっちいつちやダメだって！ ちよつと待って！」

「……チッ！」

戦闘を静観していた男子生徒だったが、アトリエ一人では対処しきれない事態を察知したか空を切るように魔法陣を描き、豪風を発生させて校舎に近づかんとするアノード達を吹き飛ばした。

「おお……すごいなあ。これは私も頑張らなくちゃだね……！」

「……とは言っても」

その様子を視界の端で捉えていたアトリエは静かに称賛し、意識をカースの方へと集中させる。が、360度を隙間なく取り囲まれているこの状況はあまり芳しくない。

「うーん……やっぱこの状況だとこれかなあ？」

両手で腰をまさぐり、アトリエはまた別のライダーエキスを取り出した。軽くもこもこと膨らんだ小瓶の中で、橙色の液体が静かに揺れている。

先程と同じく親指でコルク栓を弾き飛ばし、ベルト左側のリフトに装填した。小慣れた手つきで流れるようにレバーを外側に引っ張る。

「Let's play！」

「Inject！」

「サクセスミックス！ Let's enjoy, バツ、バツ、バースト！」

ベルト中央から橙色の渦が現れ、またしてもアトリエの全身を包んだ。渦がアトリエを解放すると、そこには橙色のがつちりとしたアーマーを纏ったアトリエの姿があった。

仮面ライダーアトリエ バーストMIXだ。

肩、胸、前腕、脛。新たに追加された装甲は使い古されたように煤け、煙のように膨らんでいた。側頭部にも、荒々しく削れた橙色の岩石のような装飾が施されている。

「うん、いい感じ。それじゃあ……」

橙色に変わった双眸はカースを捉え、火花が散るような視線のぶつかり合いを起こした。先制を取るためにアトリエが駆け出そうとしたその時。

真後ろから、一体のアノードが攻撃を仕掛けた。が、その蛮行に気付かないアトリエではない。

「よつとー」

自身に駆け寄る足音を感知し、アトリエは後ろ蹴りを繰り出す。その足が触れた瞬間、アノードは爆発を起こして吹き飛んでいった。

「グヴウウツツ!？」

突然の爆発音に全員が音の方向を注視する中、騒音の主であるアトリエは次々とアノード達を殲滅していく。

ストレートパンチ、横蹴り、チョップ。その攻撃の全てが、命中する度にアノードの全身を覆うように爆裂する。

「あとはあなたひとりっ！」

地面を蹴ってカースマテリアに飛び込み、数発殴った後に右足で力強く蹴り飛ばす。両腕を交差させることで致命傷こそ避けたものの、壁に叩きつけられたカースは既に満身創痍の状態だ。

だが、カースに諦めは見られなかった。荒くなった呼吸を必死に抑え、右腕から黒い霧もやをアトリエに向かって伸ばす。しかしアトリエはそれをすんでの所で回避し、新たなライダーエクスを取り出した。キラキラと輝く、水色のエクスだ。

「よし、最後はこれだね！」

【Let's play!】

【Inject!】

【フイニツシユミックス！ Let's GO!】

コルク栓を外して左側のリフトに残っていた空瓶と交換して装填、レバーを引くと同時に水色の渦が巻き始めた右脚を少し引く。

「いっくよー……！ せー、のっ！」

アトリエは勢いよく飛び上がり、体ごと捻って回し蹴りを放った。脚に付随する渦はカースを貫き、その歪な様相を醸す体を爆散させた。

「あ、う……」

「お……っつてちよつと待って、誰か居ない？」

爆煙が晴れると、そこには濡れ羽色をした髪の長い少女が倒れている。そのすぐ傍には、内側に少し水滴が付いた点滴用のプラスチックらしいバッグが転がっている。アトリエは変身を解除し、慌てて駆け寄って少女の体を起こした。

「えっ……えっえ、大丈夫かなこれ……どうすればいいんだろ……」

「とりあえず、学校うちの保健室に連れて行こう」

「……ふえ？」

声が出た方向に振り向くと、あの男子生徒が腕を組んで立っていた。少女に近づくと、男子生徒は辛そうに眉を顰めながらも少女をおぶって昇降口の方へと歩き出した。

「えっ、大丈夫なの!？」

「大丈夫だ！ いいからお前は帰れ！」

そう乱暴に吐き捨てながら、男子生徒は校舎の中へと消えていく。ムツとした表情をしながらも、これ以上何もすることのないシャリアはバックルをリュックにしまい、しっかりとチャックを閉めてから自身の家へと歩き始めた。

「……シャリアが、再び変身した……」

「変身の仕方も分かつてるみたいだったし、もしかして完全には忘れてないのかな……？」

今しがたシャリアが後にしたパラノーマル魔術学院を囲む建造物、その屋上。二人の少年と少女が、小さく声を漏らした。

少年の方は真っ黒な髪に同じく黒のジャケットと白いシャツを纏っており、黒いズボンのポケットに手をつ込んだままシャリアが帰宅する様子を俯瞰している。

少女の方は所々にフリルがあしらわれた真っ白なブラウスとロングスカートを身につけており、水色のセミロングを揺らしながら少年と同じくシャリアを目で追いかけていた。

「……だとしても、『ユーヴァ』が敗れた以上『作戦』は失敗だ。退いた方がいい」

「……」

下唇を噛みながらやるせない表情を見せる少女に、少年は軽く肩を叩いて口を開く。

「心配するな。あの薬は完全じゃない。いずれシャリアは俺たちのことも思い出す。そしたら、きっと俺たちのところに帰ってくる。だから………な？」

「……分かった」

会話を終えると、二人は学校から隠れるように反対側の端へと移動し、屋上から飛び降りた。もっとも、少女の方は届くはずのない一言を残してから、だが。

「…………絶対、助けるから。だから、待っててね……………」

「…………お姉ちゃん」

第2話 圧倒↓巨大化のちテイクオフ

「ただいまー」

通常の帰宅時間よりかなり遅れて、シャリアは自宅へと帰り着いた。靴を脱いで上がるとうとするシャリアだったが、物凄い勢いで部屋から飛び出して抱きつく女性によってその行動は阻害されてしまった。

「おかえりい〜！ んぎゆう〜！」

「うん、お母さん、わかった。わかったから離して？」

シャリアに抱きついてきたのは、彼女の母親であった。かなり強めの抱擁にシャリアは苦しげな声を上げるが、母親の方はまるで気にしていない様子だ。

シャリアには、エルフの母と人間の父がいる。その間に生まれたために、シャリアはハーフエルフとしてこの世に生を受けた。

エルフとしての性質などは母から半分ほどしか受け継いでいないため、魔力量や耳などが中途半端な状態になってしまっている。今でこそ気にしていないが、その昔は自身の出生をよく気にしていたらしい。

母からの深い愛情を受けるといふ様は日常的な光景ではあるが、正直なことを言えば若干鬱陶しいのでやめてほしいというのがシャリアの本音だ。しかし、シャリア自身、自分を深く愛してくれる母を前にそんなことを言える性格ではなく、うまく断れずに深すぎる抱擁を享受し続けている。

うまく断れない理由には、やはりその抱擁を嬉しく思う自分がいるという事実も含まれているのかもしれない。

「……………しようがないなあ。お風呂沸かしてるから入りなさいね。……………あつ、お風呂といええば、シャリアちゃん最近お母さんと一緒にお風呂入ってくれなくなつたよね。お母さん寂しい」

「あ、あはは……………そう、かな。まあでも、私もおとなになってきてるし？」

「うー……そつかあ。じゃあ仕方ないかなあ……お風呂、のぼせないようにね」

「はーい。ありがとー」

急かされるままに入浴と夕餉を済ませると、シヤリアは自室に籠って課題に取り組み始めた。

シヤリアの自宅は二階建てになっており、二階に上がるための木製の階段のすぐ横にシヤリアの部屋、その隣に母の寝室がある。以前までは母と同衾どうきんしていたのだが、パラノーマル魔術学院の初等部四年に進級する際に自室にベッドを設けて一人で寝るようになった。母は若干寂しげだったが、同時にシヤリアの成長を喜び承諾してくれた。十畳ほどの部屋で暫く勉強した後、シヤリアは部屋の明かりを消して床に着く。

余程疲れていたのか、この日のシヤリアは驚くほど熟睡していた。

「おはよー」

「おい来たぞー！ 急げ急げ！」

「早く早く！」

「？」

「シヤリアちゃん、昨日学校に出た怪物と戦ってたって本当？」

「変身したんだろ？ 殴り合ってたんだろ!？」

「シヤリア、勇姿、凄い……!！」

「えっ、何？ えっ……えっ?！」

翌日、学校に辿り着いて教室のドアを開いたシヤリアを待っていたのは、目を輝かせながら質問責めを繰り返す同じクラスの生徒達だった。

校内では早くも噂になっており、初等部の枠を超えて学校中で話題を作っている。

「えーっと……本当、本当……だけどその、なんていうか、えっと……」

「「うおおおおお!!！」」

シヤリアが仮面ライダーに変身して戦った事実を認めると、たちまちのうちに錬金術科の教室は歓声に包まれた。改めて同級生に囲ま

れてしまい、シャリアは席に着くタイミングを完全に失ってしまっていた。

「シャリア・ヒアラルクさん。放課後、この階の空き教室まで来るように」

「えっ」

丁度一時間目が終了した頃、教頭と思われる背の高い男が教室の扉を開いた。要件だけ手短に伝えると忙しなく教室を後にし、足早に教室を去っていく姿を見送る暇も与えられず、再びシャリアは同級生の囲いを受けることになった。

休み時間になる度に質問を受け続け、真に解放されたのは昼休みの頃になるということは、この時のシャリアには想像がつかなかったようだ。

「早速ですが、シャリアさん。校内で話題となっている、先日出現した怪物。並びに、その怪物を貴女が撃破した……という話に、間違いはありませんね？」

「えっと……はい」

陽光が差し込む静謐な空き教室にて、シャリアは面談を取り付けられていた。教頭の男の声は重苦しいものではなかったが、どこか追いつめてくるような物言いであった。

「何かしらの機械を使用しているところを見たという生徒もいました。それも間違いありませんか？」

「……はい」

ドライバーについて、仮面ライダーアトリエについて。根掘り葉掘り聞かれたが、シャリアはその質問の殆どに答えることができなかった。

その一番の理由は、シャリアが記憶喪失の状態にあるからだ。

ドライバーの所有者であったはずの父親は、シャリアの物心がつかかどうかという程で亡くなってしまうている。一体いつ、どのタイム

ングで自分は父親からアトリエドライバーを託されたのか。
なぜライダーエキスの効能を理解していたのか。
仮面ライダーアトリエとは、何なのか。

その全てが、謎に包まれていた。

「……そうですか。まあそこは追々解明させていけばいいでしょう。
最後に……そのアトリエドライバーを学校で預らせてくださ
い」

「え……？」

「貴女が学校を襲った怪物を撃退したことは褒められるべきことですが、学校としては貴女という生徒を危険な目に合わせるわけにはいき
ません」

「……」

「お父さんの持ち物だから、もしかしたら色んな思い出があるのかも
しれませんが……再び怪物が現れて貴女がまた戦った時、貴女が
怪我をしない保証はありません。そして、学校はその責任を負えませ
ん。シャリアさんのお母さんにも、申し訳がありません。だから、ど
うか——」

「でも、純血のエルフに向くドライバーじゃないですよ。私が使うの
が一、ば……ん？」

「……どういことですか？」

「え、あれ……なんで私、ドライバーのこと……」

「……日も暮れてしまいますし、このことはまた今度話し合いましよ
う。その……ドライバー？ も、シャリアさんが持つていてくださ
い。ただし、学校の許可なしに使うことはしないように」

「えっ？ でも……」

「学校は責任が取れないんです。お願いですから、使わないくださ
い」

やや怒気を孕んだ声色が、シャリアの身体を少し震わせた。

シャリアが昇降口まで足を運ぶと、そこにはいくらかの人だかりが

できていた。中には引き返す影もあるため、シャリアの目にはかなり不審に映っている。

靴を履き替えて昇降口を突破すると、シャリアの目に一つの影が飛び込んできた。

その姿には、先日現れた怪物のような怪しさがあった。

肩や腰、前腕など、全身の至る所にミサイルが装填されており、暗色の体色もあつて怪物——ミサイルマテリアはその全身で「危険」を表現している。

「ええ……」

ミサイルマテリアに困惑するシャリアを気にする様子はなく、シャリアを指差すと同時に二、三発ほどミサイルを放った。狙いはシャリアただひとりであり、シャリアの近くの地面に着弾するとすぐに爆発する。

「わわあーっ!?!」

辛うじて爆発に巻き込まれることは避けられたが、眼前で起こった爆発にシャリアはかなり恐怖を感じた。

本能的にアトリエドライバーに手を伸ばすが、教頭との話がふと頭をよぎった。

アトリエドライバーの使い方は、シャリア自身あまり言語化できていない。脳内のタンスの奥深くにしまわれた記憶がたまに出てくることがあるくらいで、使い方の全容を理解しているわけでもない。このドライバーを使えるのは恐らく自分だけだ。

だが、教頭の話が全く理解できなかつたわけでもない。生徒に何かあれば教師が責任を取らなければならないということとは理解できる。責任以前に、その『何か』が起こらないでほしい、ということも。

しかし、それが自分を止める理由にはならない。

「生徒は全員西昇降口へ！ 早く——」

「これでも喰らえー！」

駆け付けた数人の教師が生徒達を誘導し、ミサイルマテリアの対処にあたる。しかし、教師陣の攻撃がミサイルマテリアに効いている様子はない。追撃も含め涼しげに受け流すと、ミサイルマテリアは教師

陣に向けてミサイルを五発放った。シヤリアの時と違い、地面ではなく直接対象を狙っている。

「避けろっ！」

教師達は軽い身のこなしでミサイルを避けてみせる。設備に多少の被害が出ているが、そんなことを気にしている状況ではない。

緊迫した状況が続くなか、防戦一方の流れを変える人物が教師達の前に立った。

「……やっぱり気になっちゃうや。怒られるだろうなあ」

「……！ 何をしている！ 早く逃げなさい！」

教師の誘導には聞こえないフリをし、シヤリアはアトリエドライバーを腰に巻いた。同時にブランクライダーエキスを取り出し、コルク栓を親指で弾き飛ばす。

「Let's play！」

「変身！」

「Inject！」

アトリエドライバーの中央の金魚鉢に似た容器『エキスパートミキサー』に、ブランクライダーエキスが注がれる。内部の灰色の液体は回転数を漸増させながら渦巻いていき、シヤリアの身体をゆっくりと包んでいく。

「サクセスミックス！ Let's enjoy, ブツ、ブツ、ブランク！」

「ていやあーっ！」

仮面ライダーアトリエへと変身、駆け出しながら左腕で渦を薙ぎ、勢いのままにミサイルマテリア目掛けてドロップキックを放つ。着地まで考慮していなかったのか、ミサイルマテリアに命中はしたもののそのまま地面に倒れ込んでしまった。

「あいたあつ！ いったあい……でも効いてる！ このまま行くぞ！」

おー！」

「……」

軽くガッツポーズをし、アトリエは再度ミサイルマテリアと攻防を繰り広げる。

アトリエはキック主体の戦闘をしており、ミサイルマテリアはそれを捌きつつ偶に四肢を狙って反撃をする。近距離のためかミサイルは一切放たれない。近接戦闘が正解だと悟り、流れるような連続キックでミサイルマテリアを追い詰めていく。

「うんうん！ いい調子！ 次でとどめだね！」

「Let's play！」

「Inject！」

「フィニッシュミックス！ Let's GO！」

「せいやーっ！」

力の漲る右足で上段蹴りを繰り出し、ミサイルマテリアは爆発した。

が、その身体は未だ其処に残っていた。千鳥足になりながらもなんとかその場で立っていると、ミサイルマテリアは次第にその身体を巨大化させていく。やがて、ミサイルマテリアは5mを優に超える巨躯の怪物へと変貌した。

「……マジっすか」

四足歩行となったミサイルマテリアはもはや獣のようであり、あまり理性を感じさせなかった。先程まではあまり使用してこなかったミサイルも惜しまず放つが、それは明確にアトリエを狙った攻撃であった。

「えええっ!? ちょっと待って待って待って待って！」

ミサイルの対応に慣れていかなかったがために、アトリエは二発ほどミサイルを喰らってしまう。かなりのダメージを受けており、正面突破は困難かと思われた。

しかしその時、アトリエは一つのライダーエクスに思い当たった。現状を打開できる可能性に賭け、アトリエはその小瓶に手を伸ばす。

「これ……で、いけるかな」

アトリエが取り出したのは、内部で水色の液体が揺れるフライトライダーエクスだ。コルク栓を弾き飛ばしてから左側のリフトに装填レバーを外側に引いてフライトライダーエクスを混ぜる。

「Let's play！」

【Inject!】

【サクセスミックス! Let's enjoy, フツ、フツ、フライト!】

「おおー! 背中になんか付いてる! なにこれなにこれ!」

その背に飛行機のような翼を携え、水色の装甲を纏う戦士・仮面ライダーアトリエ フライトMIXへと変身を遂げた。

パイロットキャップやエンジンなど、飛行機を思わせる意匠が随所に盛り込まれており、アトリエを爽快な空の旅へと誘う。

再びアトリエを狙ったミサイルが発射される。が、アトリエは翼を使用して飛行、ミサイルマテリア自身に命中するよう誘導してみた。

「おおお! すごくすごくいい! これすつごく楽しい!」

燥ぎつつも放たれ続けるミサイルだけはしつかり避け、丸腰ながらもミサイルマテリアの巨軀に反撃する。

一点に集中して反撃していたのが功を奏し、遂にミサイルマテリアは怯んで攻撃をやめた。その間隙を見逃すアトリエではなく、最後の一撃の準備を整え始める。

【Let's play!】

【Inject!】

【フィニッシュミックス! Let's GO!】

「いっくよー! はああっ!」

右足を突き出し、飛行機雲を描きながらミサイルマテリアを貫く。

言葉にならない絶叫を上げ、ミサイルマテリアは爆散した。爆発を背景にポーズを決め、アトリエは二つ目の白星をあげる。

陰からその様子を眺めていた上位魔法専攻科の生徒——ダツタ・ホーマは、昨日と同じく怪訝そうな眼差しでアトリエを見据えていた。

第3話 咆哮↓自然体のちサデイスティック

「んーっ……あともうちよつと……取れた!」

休暇を使い、シャリアは人里離れた森で調合用素材の採取を行なっていた。陽が差し込む明るい森からは小鳥の囀りさえずのようなものも聞こえ、穏やかな風景を形作っている。

地球に存在する動物達に似た生命もいくらか見受けられるが、例えば宝石のようなものが埋め込まれていたり、例えば地球の個体より腕や足が多かったり。多少の差異は存在するが、知識としてしか地球を知らないシャリアにはその差異に気付くこともない。が、基本的には癒しを与えてくれる存在であるというところはどちらの星でも変わらない。

「……お前か。そこで何をしてる?」

「……お、この前の……めっちゃ口悪い子」

「誰がだ」

「だって名前知らないし」

「知らなくていい」

シャリアが振り向いた先には、カースマテリアの一件から知り合いとなった上位魔法専攻科の生徒であるダツタ・ホームが立っていた。休日にも関わらず制服を着用しており、上位魔法専攻科としての意識が窺い知れる。

「……ま、いいや。今ちよつと忙しいから、遊ぶのはあとでねー」

「誰も遊ぶとか言ってるねーよ。俺は魔法の練習をしに来たんだよ。分かったら散れ」

「私素材の採取してるんですー私の方が最初に来てましたー」

「うぎ」

「うぎって何!? 私の方が最初に来てたんだよ!」

「知らねーよ、さっさとどけ」

子供らしい幼稚な言い合いを繰り返して、互いに場所を取り合う。そこに譲り合いという言葉はなく、意見を押し付け合うことしか考えら

れていない。

このまま平行線の言い合いが続くと思われたが、ふと視界に入ったものが気になったダツタは一旦口を止め、謎の解明のためにシャリアへ質問を始めた。

「……なあ、お前が持つてるそれ、何だ？」

「お前じゃないですー、私にはシャリアって名前がありますー」

「うっせ、そんなのどうでもいい。それより、その手に持つてるものは何だ？」

「これ？ 『うに』 だけど？」

『うに』……？ 名前だけは聞いたことがあるが、木から採れるのか……？」

「そりゃあそうでしょ。『うに』は木から、『くり』は海から。常識じゃないの？」

「いちいち鼻につく言い方するなこいつ……」

シャリアの手に握られていたものの正体は『うに』であった。かなり万能な素材であり、アトリエへの変身に使用するライダーエキスを除けば大体の調合で使用することができる。故に必要な数も多く、こうして定期的に採取に来ている。

「……まあいい。それはそうと、お前に伝えておくことがあったんだ。それだけ聞いたら帰れ」

「だから『お前』じゃないって言うてるでしょー？ わーたーしーはー」

「ああうるせえうるせえ、分かったから話を聞けよ。この前学校を襲った怪物をお前が倒した時、黒髪の女子が出てきたろ？ あの子の正体が分かった」

「だから『お前』じゃないってー」

「しつこいぞ。で、その子の名前は『ユーヴァ・スペクトラム』。結構前から不登校になってたらしい。目エ覚ましたかと思っただらすぐに保健室を抜け出して、お前の名前を叫びながら走り回ってたそうだ」

「私？ 何で？」

「俺に質問するな。自分で考えろよ。……これで話は終わりだ。とっ

とと帰れ、練習の邪魔だ」

「ぶー、傍若無人！」

「お前が使うより俺が使った方が有意義だっただけだ」

頬を膨らませながらも、おおよそ素材の採取を終えたシャリアは不機嫌気味に森を後にする。シャリアの姿が完全に見えなくなつてから、ダツタはその場に魔法陣を描いて練習を始め出した。

「…………ごめん、今戻った」

整頓されていながらも薄暗い一軒家の一室で、扉を開けた少女は疲れ気味に言う。中に居た少年達三人は全員で迎え、近くのソファに座らせた。

「…………失敗…………だよね…………。ごめんなさい、私のせいで」

「ユーヴァのせいじゃない。俺達だって考えが甘かった。だから、気に病まないでくれ」

『ユーヴァ』と呼ばれた少女を慰めたのは、シャリアが初変身を遂げた際に水色の髪の少女と共に俯瞰していた黒髪の少年だった。申し訳なさそうにするユーヴァの背中を優しく叩き、諭すような声で続ける。

「シャリアがまた変身したのは皆も知ってると思うが、アレは記憶を取り戻しかけている予兆じゃないかと思う。だから、当面の間はシャリアに戻ってきてもらうことを目的にしようと思う。それまでは、実験と戦力の増強を繰り返す」

「異議あり」

柔らかそうなアームチェアで片肘をついている金色の長髪をした少女が手を挙げ、一身に注目を集める。ダウナー系の出で立ちがウケた経験はあまりないが、この場に限ってはそうでもないらしい。

「変にマテリイを寄越すよりも、とりあえず身を潜めておいて準備ができた時点でシャリアちゃんを迎えにいけばいいと思います」

「それもアリだとは思う。だけど……………俺も考えたくはないけど、思い出したとしても俺達の元に戻ってこないかもしれない」

「そんなことない！ お姉ちゃんは、わたしのこと、見捨てないし……」

黒髪の少年の意見に反駁し、水色の髪の少女が声を上げる。が、その声は次第に弱まっていく。その場にいる全員が、同じような気持ちだった。

「……俺も、そんなことないって信じていた。ただ、マテリアと戦ってもらえば、改善点も見つかると思うしシャリアが戻ってきた時にまた『作戦』を実行できると思う。今よりも万全な状態でな。だから、それまで皆には我慢してほしい」

「クツソ、実戦が早ええんだよ……！」

森を照らす陽が降下を始めた頃、魔法の練習を続けていたダツタは全身が鋭く尖った鋭利な怪物に出くわしていた。『シャープマテリア』と呼ばれるそれは、銀色に輝く身体から絶えず針を放ってダツタを攻撃している。

全く反撃できないまま防戦一方となっていたその窮地に、調合の素材の採取を続けていたシャリアが再び現れた。

「おっ、いたいた……って、まだ居たんだ悪口くん」

「ぶっ殺すぞ」

「だから名前知らないんだって！」

「……ああもう、分かった。ダツタだ、ダツタ・ホーム。名乗ったから、二度と悪口だの何だのって言うなよ」

「それはいいけど、シャープマテリアに反撃とかしてないの？」

「しないんじゃないんでできないんだよ！ 危ないからって学校に止められてんだー！」

「ふうーん。ちゃんと正直に守るなんて偉いね」

「お前は止められてないのか？」

「一応止められてるけど、私しかこのドライバー使えないからね。あと、『お前』じゃなくて『シャリア』」

ダツタと会話をしながらもシャリアは腰にアトリエドライバーを巻いて戦闘の準備を進める。軽快にブランクライダーエキスのコル

ク栓を弾き飛ばし、ミニリフトに乗せてからレバーを引く。

「Let's play!」

「Inject!」

「サクセスミックス! Let's enjoy, ブツ、ブツ、ブランク!」

「じゃ、今日もレッツ素材採取!」

シャープマテリアの元へ飛び込むと同時に、アトリエは両足を突き出してドロップキックを繰り出す。相変わらず着地のことを考えておらず、背中を打ちながら次の手を考えて起き上がり、軽く汚れを払いながらも一度シャープマテリアへと突撃する。

「どりゃああああーっ! あつ、痛つったあああーい!」

力任せに殴りかかるが、全身が鋭い針の山となっているシャープマテリアには一切効いている様子はない。寧ろ、拳が針に刺さったことで逆にダメージを受ける始末だ。

「あいつ馬鹿じゃねえのか……? おい、丸腰で戦おうとするな! 何か武器を持て!」

「そんなこと言われても、『錬成』はまだ習ってないんだよう!」

ダツタの声に苦しげに反応するアトリエからは、消え入るような声が漏れた。

彼女の言う『錬成』とは、錬金術によつて武具を作り出す技術のことだ。母親から少し教わっているために名前は聞き及んでいるが、パラノーマル魔術学院では錬成の勉強は中等部三年生から始める。調合よりも多少危険が伴うことが懸念されていることだ。

まだ錬成を履修していない彼女は、武具を作り出すことができないために徒手空拳で戦わざるを得ない状況となっている。

「えーつと、えつと……バーストは触れなきやだし、フライトもそうだし……どうしよう、何も思い付かない……!」

「ポーっと突っ立ってんじゃねえ! 針が飛んでくるから避けろ!」
「へ?」

間拔けな声を出してアトリエがシャープマテリアの方へ向き直ると、数えるのも億劫になる程の針が飛んできていた。一つ一つは細く

小さいが、非常に鋭利な先端はアトリエの装甲を簡単に傷付けていく。

「痛い痛い痛い！ すっごく痛いんだけどこれ！」

「なんか遠距離から攻撃できるやつとかねえのか!？」

「知らないよそんなの！ 遠距離……遠距離………なにこれ」

アトリエが身体をまさぐって見つけたのは、白い液体が閉じ込められた『シャウトライダーエキス』であった。試験的に調合したものであり、アトリエ自身もその効果をよく知らない。だが、四の五の言っている状況ではないことはアトリエ自身が一番よく分かっている。藁にもすがる思いで、コルク栓を弾き飛ばした。

「もうどうにでもなれだ！」

「Let's play！」

「Inject！」

「サクセスミックス！ Let's enjoy, シャツ、シャツ、シャツ、シャウト！」

ドライバーを乱暴に操作し、アトリエはシャウトMIXへと姿を変えた。肩部の拡声器のような装甲と、全身に同心円状に広がっている衝撃波のような意匠が目立つ真っ白なフォームだ。後ろの方では、頭部に巻き付けられた鉢巻が風に靡なびいている。

「敵を見ろ！ また針が飛んでくるぞ！」

「ちよまままって、待ってってホントに」

「わーーーーっ!!？」

目前まで迫ってきた針に驚いて発されたアトリエの声が、静謐せいひつだった森に甲高く響く。近くにいたダツタの鼓膜をも破壊しそうな勢いのそれは、シャープマテリアが放った針の全てを跳ね返した。同時に、勢いに負けたシャープマテリアが後方の木まで吹っ飛ばされた。「うわぁー何これ、もしかしてそういうアレ？」

偶然起こった事態からある程度シャウトMIXの能力に検討をつけたアトリエは、シャープマテリアの方を向いて再び大声で叫ぶ。

その叫びは強風を生み、辺りの生命を破壊する。

「やっほー！！！！」

「おお、そういう感じのやつだね！ 次いくよ！」

「おい待て、俺のことも考え——」

「わっほー！！！！」

「べろべろばー！！！！」

「あの野郎マジで……！！」

観戦していたダツタへの被害は小さくなかったが、シャープマテリアにはそれ以上に響いていた。よろけきって立つことすらままならない鋭利な怪物の前にして飛び上がり、最後の一撃を決める。

【L e t , s p l a y !】

【I n j e c t !】

【フイニツシユミックス！ L e t , s G O !】

「いっくよー！！！！」

爆音の衝撃波を円柱状に出してシャープマテリアを拘束、無防備な姿を晒したままの怪物に衝撃波を足に纏ってその身体を貫いた。

金切声を響かせながら、シャープマテリアは爆ぜ散った。ピースサインを天高く掲げ、アトリエはまた白星を一つ増やした。

「あぁ……喉があぁ……」

「そりゃああんなに叫んでればそうなるだろうな」

日が暮れ出した頃、シャリアとダツタは共に森を抜けて家路を辿っていた。シャウトM I Xはシャリアの喉にかなりの影響を与えてお

り、戦闘から数十分経った今でもダミ声が直らない。些少回復していないこともないが、少なくとも明日まではこのままだろう。

「一応言っとくが、俺の耳も大分被害喰らったんだからな。そのところ分かってるんだらうな？」

「分かってるってえ〜……」

「……そういやお前、『耳』は？」

「え？ どういうこと？」

「耳だよ、耳。他の奴らは髪から飛び出してんのに、お前は見えねえ。どうなってんだ？」

ふと、ダツタはシャリアの耳が気になって疑問をぶつけた。

一般的に、この世界でのエルフ達の耳は『エルフ耳』と呼ばれる尖った形状をしている。それ故に、髪を下ろしている女子生徒なども髪から飛び出している耳がよく目につく。

しかし、シャリアにはそれが見受けられない。正確にはダツタが気付けていないだけのだが、僅かにシャリアの髪から耳が覗いている。が、それでも気付きにくいのは確かだ。

その理由は、ひとえにシャリアがハーフエルフであることが関係している。現在の彼女はあまり気にしてはいないが、ハーフエルフである彼女は血・耳・魔力量などなど、何もかもが純血のエルフと比べ中途半端なのである。

だが、その出生あつてシャリアはアトリエドライバーを使用することができている。何故アトリエドライバーが純血のエルフに向かない物なのか、それはシャリア自身にも分からない。

ただ一つ分かっているのは、『仮面ライダーアトリエ』としてマテリイを倒し、夢にまで見たヒーローになれるということだけだ。

「色々あるんだよ、色々。それじゃ、私家こつちだから。またねー」
「……」

少しずつ、ほんの少しずつ変化しつつある自身の心情には気付かぬままシャリアを見送り、ダツタもその場を後にした。

第4話 踏舞↓超爆発のちオンステージ

「さて、何を調合しよう?」

自室の錬金釜に向かい、シャリアは思い悩んでいた。いつもと変わらない白黒のゴスロリと長髪を無意味に揺らし、懸命に思考を張り巡らせる。

「うーん……そういえば、バーストライダーエキスつて爆発がメインなんだから、火属性の素材を入れまくったら爆発が強くなるのでは?」

……よし、そうと決まったら調合しようしよう」

調合するものが決まると、シャリアは部屋の隅に置いてあるコンテナから火属性を持つ素材を持ち寄って再び錬金釜の前で勘案する。

バーストライダーエキスのレシピは

・ブランクライダーエキス×1

・(燃料)×2

となっている。調合日数は一日で済むため、良い物が出来なかったとしてもまたすぐに違う組み合わせを試すことが可能だ。

今回は、ひたすら火属性の属性値を上げて調合している。

素材の投入を済ませると、シャリアはいい塩梅で攪拌を始めた。当の本人は自覚していないが、錬金釜での調合はある程度のセンスを必要としている。そのため、感覚的ではなく論理的に物事を進める人物には難しく感じてしまうところがある。が、シャリア自身調合で苦勞した経験はさほどない。それはつまり、シャリアがある種錬金術の才を有しているということである。

「素材すらも調合して整えて、より良い物を作り上げる……うーん、錬金術って素晴らしい! この調子でやって……あーっ! 使った素材まとめるの忘れてたー!」

シャリアは慌ててノートを取り出し、忙しなく今回の調合についてまとめていく。焦るシャリアを尻目に、錬金釜の中ではゴポゴポと音を立てながらライダーエキスが作られていった。

「あー、今日も疲れた。帰る帰るー……ん？」

翌日、学校を終えて帰宅する途中だったシャリアの視界に、ふといつもとは違う光景が飛び込んできた。

基本的には閑静な街なのだが、今日はいつになく騒がしい。少し近づいてみると、そこでは数人が優しげな音楽に合わせて踊っていた。

時折音楽を止めては振り付けを確認し、再度踊っているところを見ると、何かの踊りの練習中らしい。

「あー……あれだ、なんか、何かに何かを捧げるみたいなの……」

「戦争で亡くなった多くの命に対して捧げる慰霊のための踊りだ。
錬金術科落ちこぼれ学科では習わないのか？」

「あー！ えーと、ダツタ・なんとか！」

シャリアの独り言に自然と混じりつつ罵倒をしてきたのは、同じく帰宅途中のダツタ・ホームだ。尖った目つきをシャリアに送っており、同時に若干萎縮させてもいる。

「……ダツタ・ホームだ。それより、この踊りの話は聞いたことないのか？」

「うーん、あるにはあるけど……なんというかこう、うつすらとしか記憶にないんだよね。大まかなことは分かんなくもないけど……的なの？」

「……はあ。じゃあ一回だけ話してやるから、その変な耳かつぽじつてよく聞け」

『『変な』は余計だよ！』

「うるせえ」

罵倒を重ねてから、ダツタはその踊りの概要について話しはじめた。

まず、この世界には大きく分けて四種類の生物がいる。

一つ目は動物。見た目などは地球上のそれとほぼ同じであり、また似たような生態系を築いているが、人間やエルフは食物連鎖から外れているため分けて考えられている。

二つ目は魔獣。動物のなかでも魔力などを宿して変異した種だ。

基本的には魔獣同士で集まって暮らしているが、時折他の生物を襲うこともある。

三つ目はエルフ。この世界を実質的に牛耳っており、また統制している。この世界における最大勢力でもある。

四つ目は人間。かなり希少な存在で、エルフと比べ個体数が圧倒的に少ない。エルフが統治する世界では人権らしきものも基本なく、各地に点在する人間達が少数で集まって集落を形成、エルフから身を隠しながら暮らしている。

というのも、その昔に起こったエルフと人間の統治権を巡った戦争によってその数が激減している。それは年端もいかない子供すらも巻き込んだ大規模なものであり、多くの血が流れることとなった。人間達は持ちうる兵器を総動員してこの戦争に挑んだが、エルフ達が駆使用する魔法に敵うことは二度となかった。

結果として、エルフ・人間共に多くの死者を出したこの戦争は負の歴史として現代まで語り継がれている。が、被害がより大きかったのは人間の方であり、敗北したのもまた人間だ。立場はエルフの方が上であり、エルフに見つかった人間が虐げられる事例も少なくない。次いで、エルフと人間のハーフも虐げられやすい。それでもシャリアが比較的平穏に日々を過ごさせているのは、間違いなく仮面ライダーとしての実績によるものが大きいだろう。

「……とまあそんな訳で、戦争でなくなった子供達も含めて二度と戦争が起これないようにと——おい、聞いているか？」

「うん！ 今日には味噌煮込みハンバーグ！」

「殺すぞお前」

「そうやってすぐ殺すとか言わないの！ 言葉遣いちゃんとしてないと、上品に見えないよっ！」

「お前よりマシだよ」

「そんなことないよ！ この悪口マン！」

「なんだよ悪口マンって！ いい加減にしないと本当に殺すぞてめえ！」

「ほらそういうところ！ 全然私の話聞いてな——」

「あの一」

「うわっつ!?!」

「……えっと、ふたりも一緒に練習する?」

「……遠慮します」

講師からの誘いをやんわりと断り、シヤリアとダツタはそそくさとその場から去っていった。

「……おい、お前のせいで怒られたぞ。どうしてくれるんだ」

「そう言われても、元はと言えばそっちが悪口を——」

「……おい金髪馬鹿、怪物が出たぞ」

「私は『金髪馬鹿』って名前じゃないです」

「うっせ、いいから前見ろ」

「………わお」

人気の少ない街中を歩いていたふたりの視線の数十m先、頭頂部から紫色の液体を垂らしながらゆらゆらと怪物——ポイズンマテリアが歩み寄ってきていた。毒物の影響か体表はひどく爛れており、身体に突き刺さっている鈴蘭も萎しおれている。

「中々大変そー……ま、いつも通りやるだけだね」

懐からアトリエドライバーを取り出し、シヤリアはいつものように腰に巻き付ける。ブランクライダーエキスのコルク栓を弾き飛ばしてからリフトに乗せ、その下にあるレバーを外側に引っ張る。

「サクセスミックス! Let's enjoy, ブツ、ブツ、ブランク!」

「せいやーっ!」

大きく飛び上がると、アトリエは両手を合わせて手刀にしてポイズンマテリアの頭に叩きつける。ポイズンマテリアが怯んだのを確認すると、アトリエはポカポカと殴りつけながら壁の方へと追いやり、中段蹴りでポイズンマテリアを壁に叩きつけてめた。

しかし、当然ポイズンマテリアもこれでやられる程やわではない。口のような部分から紫色をしたゼリー状の弾をいくつか放ち、アトリエ

エへの抵抗を始めた。

「おおああ危ない！　なんかもう見るからにヤバそうなんですけど
！」

「……クツソ、俺の方が、俺の方があんな馬鹿よりも戦えるのに……
！」

拳を壁に打ち付け、悔しそうな声色でダツタは呟く。どこか苛立ちも感じられるその声は、誰にも届くことなく、聴かれることもなく静かに消えていった。

「ちよああああー！」

手刀にした手を煩雑に振り回し、ポイズンマテリアに少しずつダメージを与えていく。反撃する隙を与えないよう連続して攻撃をしていたためにアトリエは無傷だったが、ポイズンマテリアは一瞬の間を突いて攻勢に転じた。

「うわっ、ちよちよ、痛い痛い……わあっ!？」

流れるような連撃を受けて怯んだアトリエに、ポイズンマテリアは紫色の液体を噴射した。その正体はかなり毒性の強い液体で、アトリエの全身をどんどん蝕んでいく。

「あうう……うああ、これっ、すっごく苦しい……！」

「おい金髪馬鹿！　立て！　怪物が来ているぞ！」

「そんなっこと、言われても……うあっ！」

ポイズンマテリアは蹲うずくまっていたアトリエを蹴り飛ばし、更にアトリエの身体を衰弱させていく。かなり弱っていたアトリエは変身を解除しそうになりながらも、まだ勝利を諦めていなかった。

反撃のために、その真つ赤なエキスに手を伸ばした。

「はあっ……これで……なんとか……できない、かな……！」

【Let's play!】

【Inject!】

【サクセスミックス！　Let's enjoy, ハッ、ハッ、ハイ
ヒール！】

「はあっ……はあっ……あれ？　治ってる！　流っ石私！　凄い！　完璧！　天才！　……うわあっ!？」

赤い渦を身に纏ってから吹き飛ばし、アトリエは新たな姿、ハイヒールMIXへと姿を変えた。赤いドレスのような意匠の装甲と脚部を覆うようなスカートが印象的な、女性らしい出立ちだ。

最大の特徴は『ハイヒール』となっている靴と、かなり強力な回復能力だ。戦闘向きな能力は一切ないため、素の戦闘力が要求される。

……また、同時にハイヒールという靴への慣れも必要としている。慣れていなければ、今のアトリエのように転んでしまうことになる。「痛たた……でも、これでもう毒は怖くない！　行くぞーってちよつと待ってちよつと待って、この靴すんごい走りづらんだけどー!」

「おいふざけてる場合か！　前見ろ前!」

「私はふざけてないよ！　ふざけてるのはこの靴で……うわあお!」

ポイズンマテリアの攻撃とダツタの罵声を一身に受けながらも、なんとかポイズンマテリアへ反撃しようとするアトリエ。しかし、やはりハイヒールという靴が激しい運動に向いていないためか、アトリエ自身も扱うことが出来ていない。

「んもー！　こうなったらこっちだ!」

遂にハイヒールMIXの使いづらさにキレて、アトリエは調べ合したてのバーストライダーエキスを手に取った。火属性の素材を中心に調べ合した特別仕様のものだ。

「Let's play!」

「Inject!」

「サクセスミックス！　Let's enjoy, バツ、バツ、バースト!」

「ここから私の反撃タイムだあ！　いくぞー!」

「せいやーっ!」

勢い任せに駆け出し、アトリエなりの精一杯のストレートをポイズンマテリアに見舞う。が、しかし。

「……………はれ?」

「ボサツとすんな！　避ける!」

「わー!？」

アトリエのストレートはまるで効いている様子がない。微動だにしないポイズンマテリアは一瞬困惑するも、すぐにアトリエに反撃の薙ぎ払いを入れた。

大きく後方に吹き飛ばされたアトリエは焦りながらも体勢を立て直し、再びポイズンマテリアへと向き直る。

「なんでか効いてない……なんでだろ、右手がダメなのかな……?」

「……とにかく、やるしかないや!」

改めて決意を固めると、アトリエは先ほどと同じようにポイズンマテリアに突撃していく。意味がないと知りながらもひたすらにパンチを繰り返し続けるが、当然ポイズンマテリアには一切ダメージは入っていない。

無意味かと思われた攻防に変化が訪れたのは、アトリエがキックを当てた時だった。

「とりゃーっ……うわあああっつ!？」

アトリエのキックが命中した瞬間、辺り数mの地面が抉れると同時にアトリエ・ポイズンマテリア両者を大きく吹き飛ばす。巨大な爆発音は耳を劈きそうなほどに響き、またポイズンマテリアの身体に軽くヒビを入れていた。

突然の事態にアトリエもポイズンマテリアも、ダツタすらも理解できておらず沈黙の時間が続く。そこで、このまま何もしないわけにはいかないと、アトリエはもう一度ポイズンマテリアに向かい、飛び上がって右足を突き出した。

「はああああ!」

ダメージが大きく動けずにいたポイズンマテリアに避ける術はなく、そのままアトリエのキックを喰らって爆散した。少し離れた場所で観戦していたダツタの短髪をも靡かせる強烈な爆風は、暫くの間街に吹き続けていた。

「おおー……すごい!」

ポイズンマテリアの件から数日後、シャリアは母と共に例の踊りを

観に来ていた。合掌を捧げるようなポーズや戦火に苦しんでいるかのような踊りは、理屈でなく心を動かす何かを感じさせている。

「シャリアちゃんが生まれるもつと前にあつたらしいんだけど………やっぱり、命が失われるのつて、悲しいことよね……」

「……お母さん」

「……ごめんね。暗い顔してちや駄目だよ。さつシャリアちゃん、続き観よう？」

「……うん」

「……なあ『カーラ』、今回の奴は少しやり過ぎなんじゃないか？」

「シャリア、かなり苦しんでるように見えたが……」

「そう言われても、調整とかよく分かんないし」

「……マジかよ」

シャリア達が踊りを眺めている裏で、少年達は密かに集まり話し合っていた。黒髪の少年に咎められていたのは、金色の長髪を持つダウナー系の少女だ。今回送り込んだポイズンマテリアについて批判されている。

「……まあ、丁度いい機会かもしれない。考えていたことがあつたら、近々それをやろうと思う」

「考えていたこと？」

「ああ……」

水色の髪の少女に軽く反応し、少年はその言葉を口にした。

「俺が直接、シャリアに会って組織の話をしようと思う」

第5話 邂逅↓問題児のちオブザーバー

「うわっ?!」

人気の少ない路地裏を抜けたちよつとした広場にて、仮面ライダーアトリエは怪人と戦っていた。

全身が黒く、装甲はどこどころだれている。よく見ると、たまに蛆が湧いていたり蠅が飛んでいたりと近付きがたい雰囲気漂っている。

しかし、だからといって放置するわけにもいかない。アトリエは苦心惨憺しながらも戦闘していた。

「アア……アア……」

「どうしょ……やっぱヒットアンドアウェイかな」

「Let's play!」

「Inject!」

「サクセスミックス! Let's enjoy, フツ、フツ、フライト!」

「よっし、レッツゴー!」

フライトMIXへと姿を変え、アトリエは宙を舞う。

一発当ててはすぐに離れ、またすぐに近付いて攻撃を仕掛ける。

だが、怪人の方もやられるばかりではない。アトリエの接近に合わせ大量の蠅を飛ばして迎え撃つ。

「うわあ!?!」

すんでの所でアトリエは回避するも、そのせいで体勢を崩し地面に転がってしまう。

慌てて立ち上がるアトリエだが、一つ気になるものが視界に映った。

人影だ。怪人の後ろに、自分とほぼ同年代であろう黒髪の少年の姿が見えた。

「危ないよ! 逃げて!」

アトリエが叫ぶも、少年は逃げようとしなない。寧ろ、怪人の方に近

付いていく。

そして、ついに口を開く。

「止まれ」

その声が発されると同時に、怪人の動きがピタリと止まる。

怪人の身体を軽く押し退け、少年がアトリエの前に立った。

「……久しぶり、シャリア」

「久しぶり……？ どこかで会ったっけ、何も覚えてないんだけど……」

「……だろうな」

苦虫を噛み潰したような表情で、少年は呟く。

「だろうなって……っていうか！ 君誰!? 君が『止まれ』って言ったら怪人が止まったんだけど!？」

「それは、俺たちがシャリアを連れ戻すために遣わせているからだ」

「どうということ……?？」

訝しげにアトリエが尋ねる。

黒髪の少年は咳払いをすると、重そうに口を開き話し始めた。

「シャリアは憶えていないかもしれないが……俺たちが出会ったのはおよそ一年前。あの時のシャリアは——」

「そこで何をしている?？」

二人の話に割って入ったのはダツタだ。

いつもの仏頂面を引っ提げてこちらに歩み寄ってくる。

「……誰だお前。このバカの知り合いか?？」

「私バカじゃないもん！ バカって言った方がバカだもん！」

「お前は黙れバカ。俺はこっちの黒いのに話しかけてる」

「理不尽だあ……」

仮面の下で哀しげな表情を浮かべるアトリエ。

一方のダツタと黒髪の少年の間には、ピリピリとした空気が流れている。

「……シャリアをよく知りもしないくせに、よくもまあ堂々と罵倒できるな」

「そいつがバカなのは事実だ。それより、お前は何者だ？ 学校を

襲っている怪人の頭領か？」

「名前を聞く時はまず自分から名乗るのが筋じゃないのか？」

「ダツタ・ホーム。お前は？」

「……サグラス・ハウゼン」

眩くように名乗ると、サグラスはアトリエとダツタに背を向けて歩き始めた。

「おい、待てよ！ 質問に答えろ！」

「シヤリアならまだしも、お前の質問に答える義理はない」

「おい！」

ダツタが追いかけてようと走り出したところで、サグラスは怪人とともに街へと消えていった。

視界外に消えたため追跡を諦め、ダツタは変身を解除したシヤリアの元へ戻っていく。

「おい、あいつ誰だ？ 知り合いか？」

「私も知らないって！ あと私はバカじゃないから！」

「まだ引きずってんのか」

「バカって言った方がバカだから！」

「るっせーな」

面倒くさそうに話を切り上げ、ダツタはその場を去る。

自身に対する罵倒の謝罪や訂正がなかったことに少し腹を立てながらも、同じようにシヤリアも家路についた。

「おかえりー。どうだった？」

「……悪い。知らない奴に邪魔された」

「駄目じゃん」

廃家へと戻ってきた黒髪の少年・サグラスは、悔しげに結果を報告する。

一番に反応を返したのは金髪の少女だ。が、すぐに水色の髪の少女も口を開く。

「お姉ちゃん、私たちのこと憶えてた？」

「……少なくとも、俺のことは憶えていなかった。恐らく、皆のことも

……」

「……そっか」

「全部、俺のせいだ。俺があの時、あんなことをしなければ……!」
齒軋りしながら、サグラスは机を叩く。

それを宥めたのは、濡れ羽色の髪の少女・ユーヴァだ。

「しようがないことだったんだよ。あんまり気負わないで」

「……だとしても、やったのは俺だ。俺は、シャリアを信じられなかった……いや、怖かったんだ。保身に走ったんだ。シャリアは、どうしようもないくらい優しい奴なのに……」

頭を抱えてボソボソと呟くサグラス。

金髪の少女は、サグラスに対し寝転がりながら気怠げに返した。

「もう過ぎたことだしどうでもよくない? 大事なものはこれからでしょ」

「それは……そうだけど」

「でしょ。……まだ、シャリアのこと諦めてないんでしょ?」

「……ああ。シャリアは、必ずこの手で取り戻す」

「その意気。じゃ、私は寝る」

「……せつかくいい師匠っぽい感じだったのに台無しだぞ……」

「話は聞いた。お前、記憶喪失らしいな?」

昼休みの空き教室。

ダツタはシャリアを呼び出し、話をしていた。

内容は、シャリアの記憶について。

「そうだけど……誰から聞いたの?」

「先生から。まあそれはいい、お前はいつから記憶が無いんだ?」

「えーっと、大体51年くらいだから……ここに入学してから?」

「なくなり過ぎだろ」

「だって……本当にそのくらい無いんだもん」

「無いんだもんじゃねえよ。なんで記憶がないのか気にならねえのか?」

「そりゃあ気になるよ。でも……」

シャリアとしても、自分の記憶喪失の原因を知りたくないわけではない。

しかし、手がかりが一つとして存在しないのだ。

唯一手がかりがあるとすれば、それは恐らくあの黒髪の少年だろう。だが、シャリアはあの少年に猜疑心を抱いている。

過去の自分を知っている可能性があるが、時折現れる怪人を従えているとなると、嘘で丸め込もうとしている可能性も包含している。

「今が楽しいし、それならそれでいいかなって」

「目の前のことしか見えていない楽観主義者の台詞だな。後悔するぞ」

「その時はその時だよ」

「それは先のことを何も考えていない計画性のないやつ台詞だ。お前みたいな馬鹿にはピッタリだが」

「私のことめちやくちや馬鹿にしてくるね!? そういうそっちはどうなのさー!」

「今はお前の記憶喪失の話をしている。論点をずらすな」

「むう……!」

「まあいい。お前に記憶があるうがなろうが、俺には関係のないことだ。お前の好きにするといい」

吐き捨てるように呟くと、ダツタは空き教室を去っていった。

一人取り残されたシャリアは、時間も忘れて思考を巡らせていた。

放課後、再び怪人・ロンリネスマテリアがシャリアの前に現れた。

相変わらずの腐臭は、シャリアの表情を簡単に曇らせる。

しかし、逃げるわけにはいかない。彼女は仮面ライダーの力を持つ存在、敵前逃亡は許されない。

「よし、行こう」

【Let's play!】

【Inject!】

【サクセスミックス! Let's enjoy, シャツ、シャツ、シャツ、シャウト!】

仮面ライダーアトリエ シャウトMIX。

発声によって遠距離から攻撃できるこの形態は、ロンリネスマテ
リイ相手には最適の形態となる。

「わーっ！」

アトリエの声が響き、ロンリネスマテリイの外装にダメージを与え
ていく。

しかし、この形態は攻撃の範囲が広すぎる故余計な被害を出しやす
いのが玉に瑕だ。街中では戦闘しづらい。

アトリエは声による攻撃を行いつつ、周囲に被害が出にくい森の方
へと誘導した。

「ここならオツケー！　じゃあもう一回！　あーっ！！」

「わー！　まー！」

「あー！　……や、やばい、喉枯れそう……」

シャウトMIXはその特性上、長時間戦闘を行い続けると喉を潰し
やすい。

そのため、よほど強い喉を持っていない限りは短期決戦を強いられ
る。

アトリエもこの例に漏れず、喉を潰しかけている。シャウトMIX
で戦うのはそろそろ限界だろう。

「うー、仕方ない。これを出そう……！」

アトリエが取り出したのは、竜巻のレリーフが刻まれた瓶だった。
中では、黄緑色の液体が静かに揺れている。

アトリエはコルク栓を弾き飛ばし、アトリエドライバーに装填し
た。

「Let's play！」

「Inject！」

アトリエドライバー下部のレバーを引っ張ると、液体が中央の容器
に注がれていく。

液体はこれまで使用したシャウトライダーエキスと混ざり、不思議
な色合いへと変化する。

「サクセスミックス！　Let's enjoy, トツ、トツ、トル

ネード！」

仮面ライダーアトリエ トルネードMIX。

まるで竜巻に包まれているかのように全身のアーマーは渦巻いており、頭部に覗く眼は黄色く光っている。

配色としては全体的に薄めだが、その静けさの中に強さを持つフォームだ。

「まずはこれ！」

アトリエはロンリネスマテリアに右手を翳す。

すると、アトリエの手から竜巻が発生し、ロンリネスマテリアを数メートルほど吹き飛ばした。

「まだまだ！ もういつちよ！」

左手も前に出し、アトリエは両手から次々と竜巻を生み出している。

ロンリネスマテリアも何度かは避けられたものの、全てを避けきることは出来ず度々吹き飛ばされていた。

「今がチャンス！ 突撃〜！」

アトリエは自らの周囲に竜巻を発生させ身に纏うと、そのままロンリネスマテリアへと体当たりを行った。

8の字を描くように飛び回り、ロンリネスマテリアにダメージを与え続ける。

やがて、ロンリネスマテリアの足取りがふらつき始めた。残り体力が少なくなっているであろうことが容易に想像できる。

「よっし、とどめだあ！」

【Let's play!】

【Inject!】

【フィニッシュミックス！ Let's GO!】

「よいしょおー！」

アトリエは小さめの竜巻を腕に纏うと、それをロンリネスマテリアに投げつけた。

竜巻はロンリネスマテリアの足に命中し、その場から動かないよう拘束している。

その隙にアトリエは飛び上がり、右足を突き出したままロンリネスマテリアを貫く。

「はあああっ！」

ロンリネスマテリアは爆散、塵一つ残らず消え去った。

「よおーっし！ 今回も私の大勝利！ いえい！」

勝利に喜び、高々とピースサインを掲げるアトリエ。

その姿を、陰から覗く者がいた。

「あれが仮面ライダーアトリエ！ いいね、おんなじ匂いがする」

第6話 手品↓古生物のちエンターテイナー

「えーつと……ごめん、誰？」

「あ、やっぱりいきなりはアレだったかな」

「いきなりっていうか……なんていうか、メンタルすごいね……」

放課後、帰路につこうと靴箱まで向かっていたシャリアは、ある男子生徒に絡まれていた。

名はラマン・マーチチャンダイズ。

普通魔法科に所属している初等部四年生らしい。

「ほら……こう言うとアレだけどさ、錬金術って結構注目されにくい学問じゃん？」

「すごいストレートに言うね」

「でき、実は俺『手品』を勉強しててさ。手品もあんまり注目されてないから、親近感を感じたんだよ」

「手品……？」

「そう。手品っていうのは、こういう感じで……」

ラマンはシャリアの前にOKの形にした左手を出す。

そこに右手の親指と人差し指を近づけると、グツと前に押し出した。

押し出された右手は、なんとそれまで姿も形もなかったコインを掴まんでいた。

「おおー！ 何その魔法？」

「だから魔法じゃなくて『手品』。魔力を使わずに、魔法みたいなことができるんだよ」

「へー！」

それから、シャリアはラマンの話を頷きながら聞いていた。

この『デイスパル』という星では、魔法を中心として世界が回っている。

それゆえ、実際の魔法よりも実用的でない手品は流行りにくかった。

全員が当然のように魔法を使うこの世界では、『魔法みたいなこと』をする必要に駆られなかったわけだ。

「へえ……うわ、もうこんな時間だ。じゃ、私帰るね！」

「うん。よかつたら、明日も手品を披露するよ」

「よろしくー！」

大きく手を振りながら走り去るシャリア。

ラマンは、その姿を胡乱げに見つめていた。

翌日の下校時間、学校近辺にマテリイが出現した。

全身からナイフが飛び出た怪人、『ナイフマテリイ』だ。

全身凶器と呼ぶに相応しいその見てくれは、見る者に恐怖と不安を与える。

「うわあ……何あれ……」

騒ぎを聞きつけて駆けつけたシャリアだが、やはりナイフマテリイの外見に若干引いているようだ。

黒い外装に覆われた肉体、様々な角度で飛び出すナイフ。

本来眼があるはずの位置から飛び出しているナイフは、他とは違う輝きを宿している。

「……まあ、いつも通りやろう」

シャリアはアトリエドライバーを取り出し、すぐさま仮面ライダーアトリエ ブランクMIXへと変身した。

ナイフマテリイの元まで一気に駆け、胸部に飛び蹴りを浴びせる。

しかし、効いている様子はない。

それどころか、逆にアトリエの方がダメージを負っていた。

「痛ったあ!？」

というのも、ナイフマテリイは全身のほぼ全てが隙間なくナイフに覆われているため、まともな肉弾戦をしようとするればこちら側がダメージを負うことになってしまう。

近距離戦は不利だと悟ったアトリエは一旦距離を取り、自身の懐をまさぐってシャウトライダーエクスを探した。しかし、どうにも見つからない。

「……切らしちゃってたかな」

ライダーエキスは、変身・フォームチェンジの度に消費されるアイテムだ。そのため、定期的に調合をしておかなければ肝心な時に使用できないという事態が発生してしまうのだ。

「じゃあ、一か八かこれで！」

【Let's Play!】

【Inject!】

【サクセスミックス！ Let's enjoy, バツ、バツ、バースト！】

アトリエはバーストMIXへとその姿を変え、反撃を凶った。

「これでっ！」

ナイフマテリアの胸部に上段蹴りを浴びせるアトリエ。その直後にナイフマテリアが爆発、お互いに吹っ飛ばされた。

「痛たた……でも、これなら向こうのダメージの方が大きいはず！」

立ち上がり、アトリエは再び攻撃を仕掛ける。

しばらくは腕を交差させながらアトリエの攻撃を受け止めていたナイフマテリアだったが、防戦一方の現状を打破する力がない訳ではない。

少しだけ後退りすると、ナイフマテリアは自身の身体からナイフを引き抜いてアトリエに投げつけた。

「づっ!?!」

投擲されたナイフはアトリエの左腕に命中、攻撃の手を緩めさせることに成功した。

これを好機と見て、ナイフマテリアは続け様に攻撃を行う。

「あうっ、うぐうっ！」

「おい落ちこぼれ馬鹿！　そこをどけー！」

「うえっ!?!」

慌ててアトリエがその場を離れると、そこに風の刃が飛来しナイフマテリアを襲った。

ナイフマテリアが後退したのを見て、アトリエを助けた人物であるダツタはアトリエの隣まで駆け寄る。

「アホかお前。アイツの身体見たら遠距離からの攻撃が適切だって分かるだろ」

「私だって分かってましたー！ でも遠距離攻撃が出来るフォームに変身するためのエキスが今ないんですー！」

「それはお前の準備不足だろ」

「ぬああんムカつく！ こっちは素材集めから調合まで全部やってるから大変なの！ 少しはその脳みそで考えたら!？」

「言ってる場合か！」

ダツタはアトリエを蹴り飛ばすと、自身もその場から離れるように地面を転がる。

その瞬間、二人を掠めるようにして数本のナイフが空を切った。

外したことに僅かに苛立ちを覚えながらも、ナイフマテリアは再びアトリエ目掛けてナイフを投擲する。

そこから少し離れた場所で、ラマンはアトリエの戦闘を陰ながら眺めていた。

「ああーそこはちよつと、ああ、首攻撃した方がいいって……」

アトリエの一挙手一投足に思うところがあるのか、ぶつぶつと愚痴るように呟いている。

しばらく眺めていたが、一向に戦闘が終わる気配がない。

業を煮やしたラマンは、ついにドライバーを手にしてアトリエたちの元に向かった。

「うう……やっぱりそろそろ限界感じてきたなあ……」

「おい、何か別のはないのか？」

「あつたらとづくに使ってますー！」

ダツタと口論を行いながらも、アトリエはナイフマテリアと一進一退の攻防を続けていた。ただ、このままでは埒が開かないのは百も承知。

しかし、アトリエには現在の状況を打開する手立てが存在しない。戦闘が長引けば、底の知れないナイフマテリアが有利になるのは確

実だ。

ダツタが撤退を提案しようとしたその時、その男……ラマン・マーチャンダイズが現れた。

「あつ、昨日の子！」

「やあ、昨日ぶりだね、シヤリアちゃん」

「……コイツは誰だ？」

「えつと、昨日手品……？ だっけ？ を、披露してくれた子」

「そ。ラマン・マーチャンダイズ。憶えてね」

「……どうでもいい。それより今すぐ帰れ、ここは危険だ」

「……それ、俺のセリフなんだけどなあ」

呆れるように呟くと同時に、ラマンは手に持っていた『エンシエン トドライバーレプリカ』を腰に巻きつけた。

赤いカーテンのようなデザインの上に黒い箱のようなものが鎮座しており、中央には白い『？』の文字が描かれている。

右手側にはマジックステッキを模したレバーが取り付けられており、まるで手品ショーのステージを模しているかのようなであった。

「何それ!？」

「……ドライバー……？ でも、あのバカのドライバーとは違う……」

「そう。まあ、模造品っぽいけどね。イミテーションってやつ」

笑いながら答えつつ、ラマンは一枚のカードを取り出す。

トランプのような意匠で、アノマロカリスのイラストが描かれている。

「さあ、世にも不思議な手品ショーの開演だ」

【Enter!】

ニヤリと笑うと同時に、ラマンはカードをドライバーに挿入した。

ポップな待機音が鳴り響き、場が熱気を帯びていく。

「変身」

小さく発すると、ラマンの手によってマジックステッキの形をしたレバーが上げられた。

カーテンが開くように黒い箱型の部分が左右に開く。そこには先ほど挿入されたカードが覗いている。

【Show time!】

【Ladies and gentlemen, welcome to the magic show!】

【ただいまより、『アノマロカリス』を公演いたします】

真つ黒なシルクハット、質素な銀色の顔の中で光る赤く鋭い複眼。

燕尾服をイメージさせるシックさと攻撃的なシャープさを同時に演出する外装は、奇妙で奇異で摩訶不思議な魅力をナイフマテリイ観客に与えている。

「変身した……!」

「凄い……私以外の子の変身見たの初めて……!」

「さあ、ここからはこの俺……いや、私『仮面ライダートリクシエント』がお相手しよう!」

仮面の奇術師・仮面ライダートリクシエント、堂々開演。

こゝからさき、まばたきするべからず。

「ちなみに、公演時間は戦闘開始から敵を撃破魅了するまでだ」

格好つけて眩くと、トリクシエントは全身を包むように真つ赤なカーテンを纏った。

その直後にカーテンは重力に従って地面に落ちたが、そこにトリクシエントの姿はない。

アトリエたち含め全員が困惑する中、トリクシエントは突然ナイフマテリイの背後に現れてその首に飛び回し蹴りを見舞った。

ナイフマテリイが身に纏うナイフなど意にも介していない様子で、膝蹴り、エルボー、ソバットというような連撃でナイフマテリイを追い詰めていく。

「あいつ……ナイフが効かないのか?」

「よつと……手品の種明かしは禁忌だからね、その疑問には答えられないな」

戦いながらもダツタの言葉に反応し、余裕を見せるトリクシエント。

実際、ナイフマテリイはトリクシエントに全くダメージを与えられずにいる。

「そろそろ終演が近いね……寂しいな」

感慨深そうな台詞を吐きつつ、トリクシエントはドライバーに取り付けられたレバーを再度動かす。

【Show time!】

【The last magic trick, start!】

トリクシエントは飛び上がってその場にとどまり、肩甲骨のあたりからアノマロカリスの前部付属肢を連想させる触手を伸ばした。

ナイフマテリイを掴んで引き寄せつつ右足を突き出し、足先から紙吹雪を溢れさせながら必殺のキック『トリック・レ・トリック』を放つ。

「うおらああっ!!」

勢いよく吹き飛ばされたナイフマテリイは盛大に爆散し、カラフルな紙吹雪を散らした。

「ご覧いただき、ありがとうございました」

深く頭を下げてから、ようやくトリクシエントは変身を解除。

楽しそうな笑みを浮かべるラマンとは対照的に、アトリエとダツタは胡乱げな視線を向けていた。

第7話 幻惑↓楽観的のちマイノリティ

ナイフマテリア撃退の翌日。

シャリアの通うパラノーマル魔術学院は、新たに出現した仮面ライダー『仮面ライダートリクシエント』の話題で持ちきりだった。新たな仮面ライダーの登場と、未だ続くマテリアの襲撃。学校側も、日夜保護者たちへの対応に追われている。

これまで学校側の許可なくドライバーを使用していたシャリアだったが、これに関してはマテリア撃退の功績もあり注意で済んでいた。そもそもドライバー自体シャリアの私物で、かつシャリアにしか扱えない、そして実際に学校を襲撃した怪人を撃退しているとなると、学校側も使用禁止にはしづらかったようだ。

しかしトリクシエントの出現で、児童生徒が率先して戦いに身を置く状況に疑念の声が増えた。

その生徒しか対処できないとはいえ、大人は静観するだけというのはどうなのか。

学校側は何も対策を取らないのか。

様々な声があるが、これらに対する学校側の対応は総じて『現状これ以上の解決策がない』となっている。もちろん教師陣も対応に当たったことが無くはないが、いずれも失敗に終わっている。完全撃破には、どうしても仮面ライダー達の力が必要なのだ。

「やらかしてくれたなラマン！」

「…………ごめんなさい」

授業が終わり、帰宅してすぐのこと。

ラマン・マーチャンダイズは、父親からの叱責を受けていた。

理由はもちろん、『エンシエントドライバーレプリカ』を使用したことだ。

『エンシエントドライバー』というのは、歴史学者たる父らが調査の末に発掘したものだ。これを研究・解析し、可能な限り原物に近付け

た模造品が『エンシエントドライバーレプリカ』。変身機能なども有しているが、最初にドライバーを使用した者しか装着できないなど、まだ不完全な状態だ。

ラマンの父親は自宅でもエンシエントドライバーレプリカの調整をしようと思つていたのだが、あろうことかラマンはそれを勝手に持ち出してしまったのだ。

「簡易化して誰でも使えるようにしたかったが、お前が勝手に持っていったからな。もうあれはお前を使用者として認めてしまった！

お前以外誰も使えなくなつたんだぞ！」

「……はい」

「……だが、家に持ち帰っていた以上俺の責任もあるし、お前だけが悪いとは思わない。お前もレプリカも無事だったのは幸いだ」

そう溢す父親だが、ラマンに向ける硬い表情に変化はない。レプリカを勝手に持ち出されたことよりも、変身資格を手に入れたせいで息子が怪物との戦闘に駆り出されてしまうのが何よりも不安だったからだ。それを、どうしても隠せないでいる。

「……ラマンが最初の使用者となつた以上、没収しても怪物と戦える戦士がひとり減るだけだ。だから没収とかはほしくないけど……戦いに行つて、傷だらけで帰ってくるような無茶はしてほしくない。そういう気持ちは、分かつてほしい」

「……うん」

レプリカを持ち出した時にラマンの内にあつた感情は、未知なる存在と出会つた興奮と、その存在に対する好奇心だけだった。この道具は何だろう。面白そう。使つてみたい。そんな感情ばかりが溢れ、それ以外のことがまるで頭に入らなかつた。親も、友人も、自分自身すらも、危険という言葉の外に置いたままだった。

父親の言葉を受け止め、ようやくラマンは自分の行いを省みた。一度の好奇心で、取り返しのつかないことをしてしまったこと。それはどうしようもなく変わらない事実だったが、それ以上にラマンの内側で更なる好奇心が育っていることは、ラマン本人すら未だ気付いていない。

錬金術科の初等部4年では、素材の属性や特徴について学んでいく。属性は火・水・風・土の4つ。素材ごとに持っている属性やカテゴリーが異なるため、調合の際は熟慮しなければならない。

「それじゃあ、青鉱石の属性を……シヤリアさん」

「はい……えーっと、確か……水と土？」

「はい、正解です」

青鉱石というのは、浅めの洞窟を持つ鉱山でよく採掘される鉱石だ。鉱石の中では比較的数が多く、装飾品などによく利用されている。

廃坑などでも見つかるが、まともな処理をされないまま放置された危険物が数多くあるため、基本的には専門の業者以外は立ち入れないようになっている。それでも危険を冒して採掘を試みる若者は依然として後を絶たないが、そういう者達の中に無傷で生還できた例はない。

「同じ素材でも効力に差はありますが、効力が低いからといって全く使えないわけではありません。5年生や6年生になったらまた勉強しますが、特性や潜力というのも——おっと、時間か。それじゃあ、3時間目はここまで」

授業の終了を知らせるチャイムが鳴り響き、生徒たちに束の間の休息が与えられた。そのまま机に突っ伏して眠る生徒、近くの席の友人とお喋りを始める生徒など多種多様に時間を過ごしている中、シヤリアの頭の中は新たに登場したトリクシエントに支配されていた。

自身の父親——実際には両親が作り上げたアトリエドライバー以外で仮面ライダーに変身した初めてのライダー。加えて変身者は、陽気ながらも謎の多い少年、ラマン・マーチャンダイズ。

ドライバーの正体や活動歴など、自身だけでは答えの出るはずのない疑問を膨らませ続ける。やがて脳がオーバーフローを起こしそうになったその時、1人の女子生徒がシヤリアに近付いた。

「……ね、ねえ」

「えっ!? あっ、ああ、えっと……何、かな……?」

意表を突かれ身体を震わせたシヤリアだが、すぐに向き直った。しかし、隠しきれない冷や汗は悠々とシヤリアの頬を伝っている。

「その、そんなに大事な話でもないんだけどさ……最近、シヤリアちゃんって変わったよね」

「変わった……といますと?」

「このクラスに転入してきた時より、明るくなったなって」

「転、入……」

女子生徒に言われ、シヤリアは自身の記憶を探る。だが、他クラスに在籍していた憶えなどまるでない。恐らく自身が失った記憶であろうことはすぐに推察できたが、だとすれば自分は以前どこに在籍していたのか。母から錬金術を学び始めたのは、このパラノーマル魔術学院に入学するよりも前だったはず。自分が錬金術科以外の学科を選んでいる姿は全く想像できない。

「……ごめん、何か嫌なこと思い出させちゃった?」

深刻な表情に変わったシヤリアを心配してか、女子生徒は不安げにシヤリアの顔を覗き込む。それに対し、シヤリアは慌てて笑顔を取り繕う。

「いやいや、そんなじゃないよ! ただその、正直あんまり憶えてないかなーって、あはは……」

「そう……なんだ。ごめんね、変な話しちゃって。私、もう行くから」
「あ、うん……」

その時のことを、もっと詳しく教えてほしい。その言葉が出なかったものの、シヤリアが口にすることは終ぞ叶わなかった。

(この感じ……前にもあったような)

「お、えっと、上位魔法専攻科のトップくんだっけ? 奇遇だね」

「黙れ金髪」

「そっちも金髪じゃん」

休み時間にトイレを訪れたダツタは、校内にて一躍時の人となったラマンに遭遇した。どちらも金髪翠眼であるが、服装と目つきに互い

の差異が現れている。特にマジシャンを意識してかタキシードを着用していたラマンの方は、ダツタに比べ存在感に満ち溢れていた。

「そう言えば所属を聞いてなかったな。お前はどこの科だ？」

「普通魔法科。と言っても、俺の魔力は平均以下だけどね」

「……なるほど。よく分かった」

『自分より下』って再確認できたかい？」

「……どういふことだ」

ダツタの目つきが変わる。猜疑心が、明確な敵意に変わった瞬間だ。

「目を見てれば分かるよ。君は怯えている。誰かより下になることを。そして、誰かより下に、一番じゃなくなった自分に価値がなくなることに」

「何が言いたい？ 格好つけならあの金髪馬鹿の前でやれ」

ダツタは不快感を一切隠そうとしなかった。一触即発の空気が辺りを包む中、ダツタは不快感に耐えかねてラマンに背を向ける。

「トイレ、してかないの？」

「お前のせいでする気が失せた」

「ふーん……それじゃあ、最後にちよつとだけ、手品師の裏話に付き合ってくれよ」

「断る」

「……俺さあ、普通魔法科の中でも落ちこぼれなんだよ」

ドアノブに手をかけたところで、ダツタの動きが止まる。タイマーがセットされていたのか、同時に換気扇が動き出した。

「さつきも言ったけど、魔力が平均以下しかなくてめっちゃ苦勞してるんだよ。授業で1、2時間やる気でしたらそれで終わりとか、そんなレベル」

「……話にならないな」

「だろ？ だから、魔法の勉強にやる気出すの怠くなってきてき。どうせ向いてないしって、投げやりになってた」

「……」

「そんな時に出会ったのが手品なんだよ。これが凄くてき、魔法とか

使わなくても魔法みたいなことが出来るんだよ。そつからスゲーハマったんだ。魔力が全然ない俺でも、魔法が使えるんだって思えるようになった」

「……………」

「…………ま、何が言いたいかつていうと、自分の将来を変えるようなものに出会うのは大事ってことだ。……そういうのに、出会えるといいな」

「…………才能のない奴が調子に乗るな」

結局、ダツタは用を足すことなくトイレを後にした。残されたラマンは、少し焦りながらも用を足してからトイレを去った。

もうほぼ日が沈んでしまった夕暮れ時、一体のマテリアが繁華街を闊歩していた。水色の薄い膜のようなものが黒一色の身体を包んでおり、今にも消え掛かっている夕日を反射して輝いている。

マテリア——ディペンデンスマテリアは、破壊行為の類を一切行っていないかった。ただただ目的地を目指し歩くのみで、マテリアの存在を知る者からは本当にマテリアの一種かと疑いの目を向けられるほどだ。

だが、それでもマテリアの端くれであることに変わりはない。いざれ悪行を働くであろうこの存在を、仮面ライダーが許すはずもない。

「おおぅ…………随分緊迫感のないマテリアだなあ」

「ね。ま、どうせこの後なんかやらかすんだらうけど」

周辺の様子からマテリアの出現を察知したシャリアとラマンは、マテリアを探し出しその行く手を阻んだ。ディペンデンスマテリアの方もシャリアたちが目的だったようで、姿を認識した瞬間戦闘態勢に入った。だがそれもあまり覇気のあるものではなく、これまでのマテリアと比べ萎縮しているようにすら見える。

「それじゃ…………こいつがやらかす前に退治しようか」

【Enter!】

「あ、ちよ、待って!」

【Let's play!】

変身の準備を始めたラマンに続き、シャリアもドライバーを取り出す。

「変身!」

【サクセスミックス! Let's enjoy, ブツ、ブツ、ブランク!】

【Ladies and gentlemen, welcome to the magic show!】

【ただいまより、『アノマロカリス』を公演いたします】

それぞれ仮面ライダーアトリエ ブランクMIX、仮面ライダートリクシエント アノマウエアに変身し、デイペンデンスマテリアと対峙する。デイペンデンスマテリアに纏わりつく薄い膜が、沈みかけの夕陽を反射して輝く。

「まずは私から!」

アトリエが飛び掛かり、デイペンデンスマテリアの顔面に蹴りを浴びせる。だが、デイペンデンスマテリアはそれを避けることもせず、そのまま顔面で受け止めた。蹴られたはずの顔面には傷一つなく、棒立ちするデイペンデンスマテリアは『今のが攻撃か』とでも言いたげな様子だ。

「うそつ、効いてないんですけど!」

「一旦離れて! 挟み撃ちにするよ!」

トリクシエントの言葉に従ってアトリエは身を引き、体勢を整える。同じくデイペンデンスマテリアも体勢を整えてからアトリエへの反撃を開始するが、その動きはこれまでのマテリアとは比べ物にならないほど鈍かった。まるで鈍重な鎧を身に着けているかのような、そんな鈍さだ。

「やあつ!」

これ幸いとばかりに、アトリエとトリクシエントはデイペンデンスマテリアを挟み左右から打撃を繰り出す。しかし、先ほどの攻撃同様効いている様子はない。

「グウウ……」

デイペンデンスマテリアが最初に狙ったのはアトリエの方だ。抱き寄せるかのように腕を伸ばしてくるが、アトリエはそれを振り払って蹴りを浴びせつつ距離を取る。やはり、デイペンデンスマテリアにダメージは入っていない。

「おかしい……なんで攻撃が効かないの……!?!」

「もしかすると……原因はこの膜かもね」

デイペンデンスマテリアを包み込む水色の薄い膜は、未だ夕陽を受けて輝いている。デイペンデンスマテリアの黒い柔肌によく映えて強く主張するものの、そこには確かな優しさがあつた。

トリクシエントはこの膜こそが攻撃を阻んでいる要因だと考え、突破のため策を講じることにした。

「俺に任せて。考えがあるんだ」

トリクシエントはドライバーに挿入されていたカードを引き抜くと、代わりに新たなカードを取り出した。カードには、全体にハルキゲニアのイラストが描かれている。

【Enter!】

「さあ、新しいショーの幕開けだ」

【Show time!】

【Ladies and gentlemen, welcome to the magic show!】

【ただいまより、『ハルキゲニア』を公演いたします】

トリクシエントを囲うように出現した円形の赤いカーテンが開かれ、新たなトリクシエントがその姿をのぞかせた。その名も仮面ライダートリクシエント。ゲニアウェア。真っ黒なシルクハットと赤い複眼はそのままに、肩や背中にはいくつもの棘が生えている。銅のような金属光沢を放つ身体は、輝きの中に映るものを怪しく歪めている。

「さあ、ショーを始めよう」

トリクシエントはマジックステッキを出現させ、それを勢いよく振り上げた。その瞬間、トリクシエントの斜め後方に巨大なサソリモドキが薄紫の煙を纏いながらぼんやりと現れた。メートル法で表すな

ら、体高はおよそ5m。黒光りの身体は、デイペンデンスマテリアを覆う膜よりも怪しく輝いている。

サソリモドキは自身の尾節をデイペンデンスマテリアに向けると、その先端から酸性の液体を勢いよく噴出した。老緑色おいみどりのその液体はデイペンデンスマテリアを包み込む膜に付着、酢酸特有の臭気を放ちながら膜を溶かしていく。

「ッ!？」

「おおお！ すごい！ なんか変な臭いするけどすごい！」

「臭いは我慢して。さあ、これでどうかな？」

やがて、デイペンデンスマテリアを包み込む膜は完全に溶けてなくなった。柔肌を晒されたデイペンデンスマテリアはその場にしゃがみ込み、自身を抱きながら小刻みに震える。

「……」

「……」

「……なんだろう、倒すのが可哀想になってきた……」

「……俺も。でも、倒さないわけにはいかないし……」

【Show time!】

「……後で供養くらいはしようかな」

【The last magic trick, start!】

再度ドライバーのレバーを操作し、トリクシエントは周囲を薄紫色の煙で包んだ。更にアノマロカリス、オパビニア、ハルキゲニア、ウイワクシアなどの生物の幻覚が現れ、デイペンデンスマテリアを取り囲む。

「グルツ、グ……!」

幻覚はデイペンデンスマテリアに一斉攻撃、同時に自爆した。後に残ったのは、デイペンデンスマテリアだった欠片だけだ。

「うーん、なんか可哀想だったなあ……来世では幸せになりますよーに」

欠片に向かって手を合わせるアトリエ。陽は沈んでしまったために欠片は反射光による輝きを失っているが、アトリエたちにはそれがどこか煌びやかに映っていた。